

平成二十八年二月吉日初版作成

おぶしを恐れず 坂谷べしもの

高橋和二郎

目次

| | |
|-----------------------------|---|
| 運命それ自身が今の自分ではない・・・・・・・・・・ | 3 |
| 永遠の今として、宇宙にひびきを放ちつつける今の自分・・ | 4 |
| 人間の真実の今を生かした生き方・・・・・・・・・・ | 4 |
| 神人は肉体を神のように扱う・・・・・・・・・・ | 5 |
| すべてを恐れず受容できる・・・・・・・・・・ | 6 |
| (付記) | |
| 宇宙究極の光が新しい光物質エネルギーになる・・ | 7 |

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

(電話) 〇四―七一ニ二―三七五二

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

運命それ自身が今の自分ではない

我即神也の我を感じたいのですが、どうしたらよいのでしょうか。この質問に対する回答は是非整理しておくべきものでしょうか。

この質問に対する回答を考えるうえで、参考になる五井先生のお言葉があります。それをみてみましょう。

「あれは運命だ、これも運命だ、という人がいます。大体の人は、自分が運命の流れの中に入ってしまっただけで、その流れに左右されていくだけです。」

ところが本当は、自分というものと運命というものは違うのです。運命というものは、前生を含んだ過去において作ったものが、今現れて消えてゆく姿だけのものなのです。

運命それ自身が今の自分ではないのです。たとえ運命がよかろうと悪かろうと、今の自分のもではないのです。すべて過去世からの想念行為が現れては消えてゆく姿なのです。ですから運命環境が悪くても、それは今の自分が悪いからではない。また運命が素晴らしくよくても、それは今の自分が善いから、えらいからというわけではない。それはすべて過去世から想念行為の蓄積が、現れて消えてゆく姿なのです。

ですから運命や環境が悪いから、といって今の自分を嘆き悲しみ、責め卑下することはありません。また運命環境がよいからと

いって、感謝こそすれ、自惚れたり威張ったりしてはいけません。それはみな消えてゆく姿なのです。

では今の自分はどこになるのか。今の自分は神の中にいるのです。神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命なのです。そして現れてくるものはすべて消えてゆく姿。

この信仰に徹すると、生き死の恐怖不安に把われなくなり、生き続ける生命がある、という不動心を会得できるのです。『如是我聞』73ページ187)

大体の人は、自分が運命の流れの中に入ってしまっただけで、左右されているため、我即神也の我を感じることができないと言われているのです。

そして、我即神也の我を感じるには、運命それ自身が今の自分ではないということを知るべきだといわれているのです。たとえ運命がよかろうと悪かろうと、今の自分のもではないのです。すべて過去世からの想念行為が現れては消えてゆく姿なのである。ですから運命環境が悪くても、それは今の自分が悪いからではない。

この環境とは、自分の現在の姿、即ち才能、容姿や家族なども含まれています。

環境、運命が素晴らしくよくても、それは今の自分が善いから、えらいからというわけではない。それはすべて過去世から想念行為の蓄積が現れて消えてゆく姿なのだ。今の自分は神の中にいるのです。神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命だと言われているのです。

現在の自分のすべてを、過去世から想念行為の蓄積が現れて消えてゆく姿なのだを確信したとき、その姿が消えていったとき、現われてくる感覚ともいえるもので、生き死の恐怖不安に把われなくなり、生き続ける生命がある、という不動心が現れてくる。それが我即神也の我であるといわれているのです。

永遠の今いつい、宇宙にひびきを放ちつづける今の自分

我即神也の我を端的に把握するのに、参考になる五井先生のお言葉がもう一つあります。それをみてみましょう。

「変化変滅し、消えて去ってゆく、この人生を唯一と信じて生きている愚かさから、脱却して、改めてこの人生を見直さなければいけません。神のみ心とつながっている一瞬一瞬が、過去、現在、未来という、業生の現象社会を超えた、真実の「今」でありまして、その今を生かすことによって、人類は真に地上天国を現出することができます。」

人間が、現在と呼んでいるのは、一体何をさしているのでしょうか。当然、今の事だよ、という答えがかえってくると思います。ところが、その今は、一瞬の後には過去になっていってしまします。そして今まで未来であった今がそこに現われてくるのです。この今はこの世の時間帯の中で、過去として消え去ってしまう今の今なのです。

ところが、真実の今、宗教的にいう今というのは、一瞬一瞬で

消え去ってしまう今ではなく、神のみ心と縦につながって、永遠の今として、光を放っている今なのです。今が一瞬ではなく、神につながった一瞬から、永遠の今として、宇宙にひびきを放ちつづける今となるのであります。

普通にいわれる今は、一瞬一瞬のことであり、宗教的の今は、一瞬を機として、その人の心を永遠のひびきと一つにひびきわたらせる、消ゆることなき今ということになるのです。ですから、普通いう今と、宗教的な今とで、その内容がまるで異なっているのです。それはあたかも、色即是空の、色が玉石混合のこの世の色であり、空即是色の色が真理そのもの、光明波動そのものの色である、ということと同じことなのです。『愛すること』113ページ)

我即神也の我を、一瞬一瞬で消え去ってしまう今の自分ではなく、神のみ心と縦につながって、永遠の今として、光を放っている今の自分だといわれているのです。それを別の言葉で、色即是空の、色が玉石混合のこの世の色の自分ではなく、空即是色の色が真理そのもの、光明波動そのものの色の自分であるといわれているのです。

人間の真実の今を生かした生き方

私たちは、我即神也の我を現わすために、我即神也の印や呼吸法等により日々実践してきていますが、それを実践するにあたり、特に留意す

ることがあります。この点については、拙書『究極の光の一筋を降ろす大天命』で触れていますが、その要点を整理しましょう。

●宇宙神と直接に交流し、自らの直観力を磨き、本来の力を取り戻し、自らの肉体を開発する（チャクラを開く）ことによって、自らの生命力を高め上げてゆくことを意識すること。

●そうすれば、宇宙神のオーラ（大生命力）は異彩を放ち、究極なる光を我々に送ってくれるのでそれをイメージし、受け取ることに。

●直観力とは、五感を超えた感覚（天のひらめき）である。それを養い、否定的想念、暗黒的想念の波動を見極める力をつけること。

●自らが放つ想念と波長が合う、周りの想念を引き寄せてくるので、自らが放つ想念を祈りにより浄めておくこと。

このように宇宙神のみ心のひびきに自己の想念波動を合致させてゆくこと、別な言葉でいえば宇宙の法則に乗れば、「肉体界に存在しながら、高い深い叡智に導かれた生活、人間の真実の今を生かした生き方、言い換えれば人間愛と調和の心で、一瞬一瞬を生活できるようにする。地球人類が永遠の生命をこの世に輝かせ自らをより進化させるためにはこの生き方を実現されなければならない」（『愛すること』116ページ）と五井先生は、解説されています。

神人は肉体を神のように扱う

また我即神也の我を自覚できるようになると、自分自身の肉体を限

りなく神聖なる神のように扱うようになる。そういう普段からの心がけを通して、肉体は神聖にして高貴に神々しく輝いてくるのであると昌美先生は言われています。

「人間は、自分自身の肉体を神聖なる神のように扱うことも出来れば、罪あるもの、汚れたものとして扱うことも出来る。また、肉体を、進化創造を顕現するものとして扱うことも出来る。

自分自身の肉体をいかように扱うかは、人間各自の精神のレベルに即応している。

究極の真理“我即神也”の境地に至っている神人たちは、もちろん自らの肉体を神聖なる神のように扱っているわけである。また、まだこの境地に自然に至っていないけれども、肉体を限りなく神聖なる神のように扱うよう心しているのが神人であると言える。

こういった段階の神人たちは、まず自分が最も納得できる方法で、それを行っている。

例えば、息を吸っている時、自分が息を吸っているのではなく、自分の中の神が息を吸っていると思うのである。だからこそ、空気の有り難さが身にしみて感じられるのである。そして、空気さん有難う、私の肉体を維持してくださいと・・・と、自然に内なる神が感謝を捧げるのである。

また、道を歩いていけば、自分の内なる神が大地を歩いている、そう思うのである。ああ、なんと有り難きかな！！大地の無償なる恩恵によって、自分の肉体はこうして生かされている！大地さん有難う！というような具合になるのである。

一回一回の食事なども、単に自分が食物を食べるのではなく、内なる神が自分の中で食していると考えるのである。

それゆえ、内なる神は暴饮暴食を好まず、また、すべての食物は生命を支え、維持してゆくための尊い存在として考えられるので、食物有難うございますという感謝の念が自然に湧きでてくるのである。(略)

このように、真理を理解している人と、まったく理解していない人との間では、日常生活を通して全く当たり前のことに対しても、大きな差が生じてくるのである。我即神也の境地まで至らなくとも、この尊き神の器で、ある肉体を機械装置のように扱っていたのでは到底真理の道とは程遠い、依然として変わらぬカルマの道を歩んでゆくより仕方がないのである。内なる神が思考し、食し、動き、働き、決断を下すのである。そう考えると、肉体を決して粗末に扱えない。本当に尊敬し、敬意の念を込めて大切に扱わなくてはならない。

そういう普段からの心がけを通して、肉体は神聖にして高貴に神々しく輝いてくるのである。『白光誌2002年11月号』7ページ)

すべてを喜び受け容れられる

昌美先生は、『白光誌2002年11月号』18ページにおいて「宇宙究極の光は、それ自体、肉体には見えない、聞こえない、触れ得な

い、感じないという微妙なる光の波動であるが、肉体に取り込むことにより、物質エネルギーに変容するため、神人は他の一般の人々と比べて比較にならないほどの善きもののみ、素晴らしきもののみ、成功のみ、繁栄のみ、健康のみを引きつけ、現実に実現させてゆくののである」と言われています。

そして、それを確実に現わしていくためには、「我即神也の真理を理解し、心素直に何度も何度も印を組み、宣言文を心の中にたたきこむならば、自然に否定的な想念が消されてゆき、不思議に自分の望むことが成就し、体験を積むことができる。いったん体験をつかむと、その感動、感触、実感、感激が忘れず、その素晴らしき体験ゆえ、次にはもっと効果的により大きな体験を積むことができるように、さらに自分に拍車をかける。そしてついには自分の望むいかなることも完全に成就させてゆく。小さな事柄から体験を重ね、実証してゆく必要がある。そしてそれを積み重ねてゆくと、ある時世界的な大災害や突然の状況に立たされたとしても、日頃の光明思想徹底行の積み重ねで、すべてのいかなる状況からも逃げず、恐れず受容する心構えができ、いかなる大難も小難に変え、さらには自分を含め自分の周りが、すべて無傷で終わってしまうのである」と言われているのです。

地球の安寧と世界人類の平和のために祈る神人にとって、今こそ、我即神也の我（本心）のあり方、現わし方を知り、マスターすべき時ではないでしょうか。

(付記)

宇宙究極の光が新しい光物質エネルギーになる

神人の肉体を通して働く宇宙究極のエネルギーについて、『白光誌2002年11月号』18ページをもとに、整理してみよう。

● 神人たちが宇宙究極の光を肉体身に浴び、世界平和を祈り、印を組むと、その結果宇宙究極の光と肉体のエネルギーが一体となり、そこでミックスされ全く新しい物質波動となって放出される。

● 本来、宇宙究極の光、エネルギーは物質エネルギーそのものではない。無限なるエネルギー、神秘なるエネルギーであるけれども、媒体に取り込まなければ、地球空間に浮かんで存在しているだけで何ら作用はしない。

● 肉体の体内に取り込まれてこそ、体内の物質エネルギーと一体化し、そして新しい光物質エネルギーとなり、あらゆる時間空間、そしていかなる物質の中にも入り、浸透してどこでも行き着くのである。

● 宇宙究極の光も、神人という媒体が地球上に存在しているからこの地球上に、富士聖地降ろされてくるのである。しかし、この神人が印を組まなければ、その本来の偉力も100パーセントと発揮されない。地球空間に存在するだけである。

その光を大いに活用する時、その光は宇宙神そのものの働きを活性化させてゆくのである。

● すべての生命は、(一体となって)宇宙の大法則、宇宙神への一点に向かって進化創造大調和を果たしてゆくのである。

例えば、果物も野菜も、元からもぎ取られてただそこに存在しているだけでは、それ自体何の役にも立たない。時間がたつにつれ腐ってゆくだけである。その物質本来の持つエネルギーは、徐々に解体してゆく。だが、それらの物質を人類や動物が食べることにより、その物質は体内でよみがえり、体内の他の物質と一体となり、新たなエネルギーとなり、活躍するのである。

● 我々神人の光明なる思考の波は、物質に触れ、それを変容させることが出来るのである。光明波動は、宇宙神のみ心であるから、本来永遠に消えないものである。だが、否定的想念を消すために、かつまた浄めるためにこの光明エネルギーが使われる場合、普通ならば否定的想念エネルギーを光明化するためには、膨大な物質エネルギーを必要とするが、世界平和の祈りを祈り、印を組むことにより、その光明エネルギーは乗数的に増大し、否定的想念に打ち勝つのである。

● 神人は本書6ページにあるように、他の一般の人々と比べて比較にならないほどの善きもののみ、素晴らしきもののみ、成功のみ、繁栄のみ、健康のみを引きつけ、現実を実現させてゆくのである。

今世紀に入り、宇宙的規模で銀河系の中心から大量の生命エネルギーが地球に流入されて来ています。この生命エネルギーを自分の力として、活用することを実践している私たちは、五井先生が説かれた「救世主の器」という存在になったといえるのではないのでしょうか。